

代表機関：兵庫医科大学

課題名

強迫症を対象とした新規認知行動療法アプリ開発

分担機関：emol株式会社

研究期間：令和6年4月～令和9年3月

研究目的・内容

- 経済的損失あるいはQOLの低下という面で最も障害度の大きい10大疾患の一つ[1]である強迫症(Obsessive Compulsive Disorder: OCD)の治療において、第一推奨の治療法として薬物療法と認知行動療法(CBT)があるが、認知行動療法の施行は6.2%[2]と極めて少ない。CBT実施可能な医療機関や医療者が限られている[3]という理由から施行が浸透していないため、CBTを実施可能なアプリを開発することで解決を図る。

取り組み・成果

- 強迫症治療のためのCBTアプリの原理検証機を開発し、性能評価を実施した後に初号試作機を開発を完了した。
- 開発計画についてPMDAと相談し、概念的な要求事項を明確化した。

今後の展開

- 医療機器プログラムとしての承認に向けて治験を実施する。

1. Murray CJ, Lopez AD, Jamison DT. The global burden of disease in 1990: summary results, sensitivity analysis and future directions. Bull World Health Organ. 1994;72(3):495-509.
2. 高橋史, 武川清香, 奥村泰之, 鈴木伸一 (2018). 日本の精神 科診療所における認知行動療法の提供体制に関する実態調査.
3. 向井馨一郎, 松永寿人 強迫症のアンメットメディカルニーズ 精神科 = Psychiatry 2021 Vol. 39 Issue 4 Pages 409-415

クラス分類：クラスII

患者と医師の連携を強化

- 診察時の患者とのコミュニケーションを円滑にする



従来の方法との比較

- 従来の対人CBTと比較し、シームレスなCBTの施行が実現

